

【文部科学大臣賞：中学生の部】

「私達の手で」

山形県・山形市立第五中学校

1年 鈴木 日優 さん

私はよく、周りの人から「姉より姉っぼい」と言われます。それはきっと、私は正義感が強く、姉を守らなければといつも気を張っているからだと思います。

私と1つ違いの姉は、アスペルガー症候群という知的障がいがあります。

アスペルガー症候群は、思ったことをそのまま言葉にしてしまったり、発言が一方的という特徴があります。姉を見ていると、人の話を待つことができず、自分の興味があることをずっと話してしまいます。しかし、姉は人見知りのため、話したことの無い人に対しては静かになってしまいます。姉の障がいは理解されにくいいため、周囲の人から冷たい目で見られることがありました。ですから私は、姉が周りの人にいじめられないようにと常に気を配り、何かあったら私が守ると思って生活してきました。

ある日、姉は同じ学年の人から話しかけられました。でも姉は、上手く受け答えができなかったようです。ただ「うん。」「ううん。」などと答えられれば良かったのかもしれませんが、姉の頭の中は「え…？」の文字でいっぱいだったと思います。どうしていいかわからず、姉はパニックになってしまいました。その日の夜、このことを姉は、母に泣きながら話していました。私はそれまでの自分のことを振り返ってみました。私は姉を守らなければという責任感で、姉が話そうとすると、つい口出しをしてしまい、姉は「自分で話す」ということができなくなっていたのです。このとき私は、自分が姉を守りすぎていたことに気づきました。姉に対して申し訳ないという気持ちで、私はこれから姉にどう接していけばいいのかわからなくなってしまいました。

次の日に、家族会議が開かれました。まず最初に、なぜこのようなことが起こってしまったのかと聞かれ、私は「姉のことをいつもいつも守っていたから。」と答えました。すると母は「家族みんなでこの家に住んでいるのだから、助け合うのは当然だよ。でも、自分のことは自分で守るということを目指しながらみんなで支え合っていこうよ。」と言いました。この日の家族会議で「自分のことは自分で守る」ことに決まりました。その日以降、姉も私も自分のことは自分でするよう心がけて生活しています。でも、時には姉妹同士で助け合ったり、慰め合ったり、笑い合ったりして、以前より、今の方がより良い関係になったと思います。

ます。

私は中学入学後、テニス部に入部しました。テニス部は夜も土日も練習があります。姉は私が練習している間、家の掃除をしてくれたり、練習から帰ったら、「おつかれ様」と声をかけてくれます。姉がいるから私は部活動がんばれています。

障がい者には手を差し伸べようという声を聞きます。それはもちろん大切なことです。しかし、障がい者は助けられる側、健常者は助ける側という一方的な関係をつくるということではありません。実際、私は姉に助けられています。たまたま障がいがあるというだけのことで、同じ人間同士です。お互いに助けたり助けられたりという当たり前の関係を作っていくことが大切なのです。

私の姉は祖母や祖父が好きで、高齢の方や体の不自由な方を支える介護士になりたいという夢を持っています。その夢のために姉は、休みに帰省してくる曾祖母の介護をしてくれます。また、幼い従兄弟たちの面倒も見てくれるので、家族のみんなから信頼されています。私はいつでも姉の夢を応援しています。そして、世界中の人々の可能性をもっと広げ、障がい者の方も活やくできる、そんな明るい未来を私達の手で創っていきたいです。